

1. はじめに

本学校園では、幼小中一貫教育の11年間の学びを通して、「確かな学力」の育成をめざし豊かな「学び」をつくる子どもの姿の実現に向けて研究に取り組んできた。今年度はその2年目にあたり、「子どもの学びをつなぐ」というサブテーマを受けて保育・教科学習を中心に取り組んだ。一貫して育てたい力としての思考力・判断力・表現力の育成という視点と、思考力・判断力・表現力を育成する上で子どもどうしの有効なかかわり合いという2つの視点から、より豊かな学びの姿の具現化をめざそうと考えた。

以下に、保育と各教科の実践から今年度の研究の成果と課題をまとめてみたい。

2. 教科部会の成果

(1) 思考力・判断力・表現力の育成について

①表現する活動を取り入れることで思考力・判断力・表現力を高める

今年度教科部会で取り組んだことは、まず各教科において思考力・判断力・表現力をどのようにとらえ、教科として授業の中でどのように取り組むのか話し合い、教科の構想としてまとめていった。その構想に基づき実践を行い、以下のようなことが分かってきた。既習の知識・技能を活用し、体験から得られた事実や感じ取ったことを、そのまま言葉で表したり絵や図で表したりするだけではなく、得られた事実や感じ取ったことを、既習の知識・技能と照らし合わせ、比較・分析するなどの思考過程を経て、自分の考えをまとめ、それを言語的な活動を通して表現することが、思考力・判断力・表現力を高めていく上で有効である。そして、課題解決の過程において、子どもどうしのかかわり合いがあることで、考えに広がりやすくなり、深まりが出たりすることも分かってきた。

中学校理科の実践において、実験・観察をもとに、そこから得られた事実を班ごとにまとめ、それらを発表し合う活動を取り入れている。この実践では授業の中で予想したり、結果から考察したり、出した考えをまとめていったりする様々な過程において、深く思考させたいときに、ホワイトボードを利用して話し合いながら考察させることで科学的な思考力の育成にせまろうとした。観察の段階でも協同的に活動をすることで、個々の考えを出し合い班で一つの意見としてまとめていく活動を行っている。ホワイトボードを活用することで、言葉や文字だけでなく図で表したり、式で表したりして説明する姿がみられた。そのことでホワイトボード上で考えを出し合ったことを追加・修正しながらまとめていくことが容易になった。ホワイトボードを囲みながら思考・判断・表現の活動を一体的に進めていきながら、子どもどうしでお互いの考えを伝え合い、理解し合う過程で思考が深まり、自分の考えを深めている。この事例では、班の中の話し合いや班の考えを発表し合うことが、事実を分析し、一般化しようとする科学的な見方、言い換えれば科学的思考力を高めていく上で効果的であったといえる。このように学習活動の中に表現する活動が入ることで、思考力・判断力・表現力が高まっていくことが理解される。

②体験的な活動を取り入れることで思考力・判断力・表現力を高める

先述した表現する活動と共に、体験的な活動が子どもの思考力・判断力・表現力を高める上で、非常に有効であることが分かった。体験的な活動が入ると、ある教科に苦手意識のある子どもにも取り組みやすくなる。特に発達段階の初期においては、子どもの意欲にもつながる。学習意欲が高まることによって課題を解決しようと思ったり判断したりする取り組みも活発になり、体験しながら自分で考え（思考・判断）たことを、友だちに伝えたり、逆に友だちの考えを聞いたりする活動自体が、思考力・判断力・表現力を高めることにつながっていくと考えられる。体験をもとに話し合い活動をすることで、話し合いの内容が具体化されてお互いに理解しやすくなることが分かってきた。

小学校の外国語活動では、英語を使って買い物ゲームをする活動を中心にした授業で、子どもが買物を英語でやりとりしながら感覚的に英語を理解したり、場面に応じて言葉を選んだりすることで思考力・判断力・表現力を高めていこうとしている。買い物ゲームという子どもの身の回りの体験を取り入れることで、子どもの興味・関心を引き出しながら、英語に親しめるよう工夫がされている。

③知識・技能を活用するための手立てを工夫することで思考力・判断力・表現力を高める

課題を解決する際には、解決に至るまでの大まかな見通しや方法、手順などがみえていて、自信をもって取り組むことができる。知識や技能をもっていても、それをどのように活用すればよいのかが分からなければ課題解決には至らない。そのためには必要な知識や技能を活用するための手立てが必要である。知っている知識やもっている技能をもとに、根拠をもった説明をさせるためには、どのように活用すればよいのかということに気づかせ、課題解決までの見通しをもてるようにするための手立てを工夫することで、思考力・判断力・表現力を高めていけることを、社会科の実践事例の中で示唆している。社会科では、小学校・中学校ともに「中核となる視点」を明確にすることで、それをもとに既習の知識を関連させ、また別な視点からそのつながりをみていくことで多角的な見方を取り入れ、より深く課題である授業のねらいに迫ろうとしている。この「中核となる視点」は知識・技能を活用し課題に迫っていく上での手立てといえる。

(2) 思考力・判断力・表現力を育成する上でのかかわり合いについて

①発達段階に応じたかかわり合いを通して思考力・判断力・表現力を高める

各教科の取り組みの中で分かってきたことの中に、かかわり合いの形態に違いがあることが分かってきた。それは集団の規模であったり、集団の質的な違いであったりするが、教科的な違いよりもむしろ発達段階の違いによるものではないかと思われる。初等部前期のような段階では、とにかくいろいろな友だちの考えにふれ自分の中に取り入れたり、自分の考えをみんなに伝えたりする活動が多い。小学校の音楽の実践事例では、学級という大きな集団の中でいろいろな友だちの表現を模倣しながら自分なりの表現を創り出していく活動においてそれが表れている。それに対して初等部後期の発達段階からは学級全体が一つのテーマにそって相互に関連させ合いながら、全体での話し合いを行うことが可能になる。一方で中等部になると自分のこと、あるいは自分に身近なことが話題になるような場面では、少人数の方が話がしやすいという傾向が出てくる。自分の目的にあったかかわりを求めていくというようなこの時期に特徴的なかかわり合いもみられる。そこで、より話しやすい雰囲気を作り出すために人数を制限するといったことも考えられる。その例として、中学校の英語や音楽の実践事例で、日常的な生活場面から会話やリズムにつける言葉を活用し、ペアやグループでの活動を取り入れている事例があげられる。

このように、発達段階を踏まえ、設定した課題の中身によって、かかわり合いの規模やメンバーを意図的に構成していくことが、思考力・判断力・表現力を育成するためのかかわり合いに効果的であることが分かってきた。

3. 今後の課題

今年度の取り組みから課題としていえることは、一つは思考力・判断力・表現力の育ちを11年間の発達段階の中でどのように育てていくのか、より詳細にみていく必要があるということである。教育研究ブロックの3つの期で思考力・判断力・表現力を整理しているところもあるが、今後全ての教科において、それらを整理していく必要がある。そして教育課程の中に明確に位置づけていきたい。その際、外からとらえにくいという面をもつ思考力・判断力の育ちについては、それをとらえるための手立て、評価の仕方を検討していくことも必要である。現在行っているふりかえりや自己評価なども大事にしながら、かかわり合いの中でとらえていくことが必要ではないかと思われる。もう一つは、かかわり合いの中身としてどのような体験的活動と言語的活動の組み合わせが思考力・判断力・表現力を育成するために有効なのかを分析し、教科の特性との関連なども併せて実践研究を通して明らかにしていきたい。11年間のつながりの中で、基礎・基本を確実に定着させ、身についた知識・技能を活用させることで思考力・判断力・表現力の向上を図り、豊かな「学び」をつくる子どもに迫っていけるように今後さらに実践を積み重ねながら、検証していきたいと考えている。

(文責 奈良井 正)